



特集 回勅『兄弟の皆さん』を読む

回勅『兄弟の皆さん』（2020年10月発表）日本語公式訳が、このほど発表となりました（2021年9月、カトリック中央協議会）。この回勅の成立は、2019年2月、教皇フランシスコがアラブ首長国連邦を訪問し、イスラム教の指導者アフマド・アル・タイーブ師とともに共同宣言書「世界平和と共生のための人類の兄弟愛」を作成したこときっかけでした。貪欲な新自由主義、コロナ危機の中、人類が真の平和な世界を築くために…。

そこでまず、教皇が心を動かされた「イスラームの平和」に、耳を傾けてみることにしましょう。（次頁）

イスラームの平和思想

■ クレイシ・ハールーン・アフマド (日本イスラーム文化センター事務局長)

慈悲あまねく慈悲深きアッラーの御名において

私たちの価値観を表すイスラームという言葉は、帰依・服従・献身・安寧などの意味を含み、サラーム=平和・平安という名詞やアスラマ=帰依する・服従する・委ねるという意味を含む動詞と同じ語源を持ち、それは、サリマ=安全である・健全である、といった意味の動詞から派生しています。つまりイスラームというその言葉の意味からも、アッラー（創造主である唯一の神）に全てを委ね、帰依し、神の御意志に従うことが心身ともなる平和の実現に通ずるといふ、信仰と平和の関連性を解することができます。

イスラームの教義の源泉である聖典クルアーンや、預言者ムハンマド（彼に祝福と平安あれ）の言行録であるハディースにおいても、平和については多くの箇所で見出されています。

例えばクルアーンには「誰か一人（の命）の代償としてでもなく、地上における腐敗ゆえにでもなくして人一人の命を奪った者は、あたかも全人類を殺したようなものである。また、それ（一人の命）を生かした者は、あたかも全人類を生かしたようなものである。」（第5章《食卓章》32節）、「人々よ、本当にわれらは、あなた方を一人の男性と一人の女性から創り、あなた方が知り合うべく、あなた方をいくつもの民族や部族とした。実にあなた方の内、アッラーの御許で最も高貴なものとは、最も敬虔な者なのである。アッラーこそは全知者、通曉されるお方」（第49章《相談章》13節）といった章句があり、また「あなた方にはあなた方の宗教があり、私には我が宗教がある」（第109章《不信仰者たち章》6節）と多様性を認めて互いに平和共存することを奨めている節もあります。

ハディースにも「すべての被造物はアッラーの家族のようなものであり、アッラーは家族に親切



ハールーンさん

にする者を愛される」（アル・ブハーリー）、「他者に害を与えることも、害に対して害で応ずることも禁じられている」（イブンマージャ）といったものがあり、人々が互いに憎しみ争うのではなく、慈しみ合い平和的に接するよう奨めています。

このようにイスラームでは、神のもとに全ての命と尊厳は等しく、互いを尊重し合い、人類が平和に共存すべきことを随所で具体的に説かれています。このような創造主に従順な生き方は、人々の心に安寧をもたらす、真に平和な社会建設へと通じる道です。

アフガン問題について

世界平和を心から願う私たちですが、昨今ではアフガニスタンでタリバンが再び政権を掌握したことが話題になりました。文明の交差点などとも云われる彼の地、歴史的に見ても様々な民族や文化、思想、政治的権力などが交錯し続け、近代だけを見ても1800年代から度重なるイギリスの侵略とロシアの南下政策の確執の狭間に置かれたおよそ100年間、その後米ソ冷戦の時代、1979年に始まったソ連軍侵攻、対して戦うムジャヒディンを、地下に埋蔵される天然資源を獲得しはじめ、中央アジア覇権のためにサポートしたアメリカ。このような対立構造に巻き込まれ戦場と化し、甚大な犠牲を払うのは常に一般市民でした。

1989年ソ連軍撤退後は、ムジャヒディンの内部衝突により内戦状態となり、各地で起きた派閥抗争により治安は激悪化、またも非常に痛ましく犠牲となったのは一般人たちでした。多くの市民が命を落とし、残った国民もこの時およそ600万人が難民化したと言われ、取り残された地雷による犠牲者なども出続けました。このような惨状に対し国際社会は、救援どころか武器提供などにより、更に内戦を激化させることもありました。

この窮状を憂い、難民キャンプの神学生たちが世直しのために学生運動として活動を顕わしたタリバン。94年カンダハールでの秩序回復に始まり、民衆から歓迎され、96年にほぼ無抵抗でカブールにタリバン政権が成立。その後2001年に起きた9.11同時多発テロ。その遂行にアフガンの直接的関与はありませんでしたが、実行したとされる国際テロ組織アルカイダの首謀者を匿っているという大義名分から、対テロ戦争と称してアメリカによる空爆が開始され、またも多くの一般人たちが甚大な犠牲を払いました。高空からの爆撃は無差別に人々の命を奪い、街は破壊され、経済は悪化、若者たちは教育も受けられなくなりました。人間としての尊厳は保たれず、最低限の生活すらままなりません。

私自身、調査の為にアフガニスタンを訪れたのは9.11の少し前の時期でした。きっかけは子どもたちが肺炎で亡くなっているというニュースでした。実際に訪れて目にした光景は、皆着る者も食べる物もなく、動物の餌を食べたりしながら飢えを凌いでいる状況でした。私は古着や食料を配りました。その後更には早魃に見舞われ、より苦しい状況を余儀無くされる彼らのために少しでも力にならなくてはと思い、JIT (Japan Islamic Trust) という私たちの組織として支援を開始しました。現在も支援活動は続けており、古着や車椅子を積んだコンテナをこの20年間で百数十台、最近では9、10月に一台ずつ、11月末にも一台発送を予定しております。また反面、タリバン政権下のアフガニス

タンを訪れて驚いたことのもう一つは、市街地の治安の良さでした。アザーンが聴こえると商店はシャッターも閉めずにモスクへ礼拝に赴き、通りの露店も商品に布を被せる程度でした。日本も含めこんなに治安の良い国は無いのではないかと考えた程です。メディアが報じていた印象とはまるで違う現実もそこにはありました。

政治的な詳しい内情は察しかねますが、アフガニスタンの人々にも、当時も今もタリバンを支持する人もいればそうでない人もいるでしょう。20年前、無法状態だったこの地を平定し国民から歓迎されましたが、その後の厳しい政策や戒律の施行、政権の内紛、一部生じた強硬派による暴虐など確かに芳しくない事態も招きました。しかし現在、暫定政権として復権したことが一つの事実であるなら、当時犯した失敗の面を繰り返さず、行政としてアフガニスタンの皆様のためになるべく、やるべきことをやってほしいと思います。

私たちが共に支援活動を行う現地在住の友人より受けた連絡からは、現在物価が高騰し、仕事もなく食料も不足している状況や、これから気温が氷点下にもなる冬の到来などが懸念されます。微力ながらできる限りの支援は続けて参りたい次第です。

また、過激派組織 ISの活動が各地で縮小の様相を伝えられているようですが、アフガニスタンやパキスタンにおいては活発化している印象を受け、そのようなこともとても心配しております。アフガニスタンが本来の美しい国土を取り戻し、そこに暮らす皆様の状況が一刻も早く良くなることを心より願います。

人類が真理を認め、創造主である唯一無二の神に従い、世界平和が実現されますように。

アーミン アッサラム アライクム (あなたに平和があるように)

回勅『兄弟の皆さん』—呼びかけに応えたい—

■ 橋本晶子（援助修道会）

「フラテッリ・トゥッティ（兄弟の皆さん）」というタイトルを知ったとき、嬉しい気持ちになったのは私だけでしょうか。このように親しみを込めて呼びかけられる時、私たちの心に温かさが流れるのを感じます。

教皇フランシスコによる第3番目の回勅は、「ともに暮らす家」のイメージが『ラウダート・シ』より引き継がれ、さらに深い愛情を込めて語られているように受け取りました。

さて、これからこの回勅を手にする方、また再読される方に、私がいただいた視点を分かち合いたいと思います。

①第2章から自己を見つめる。

通常は初めから読み進めるものです。しかし、第1章は「閉ざされた世界の闇」という厳しい現実から始まります。私たちはこの約2年間世界的パンデミックを経験し、閉ざされた状況に、心身ともに疲れ果てていることでしょう。ですから、闇を直視する前に、第2章から読んでいきたいのです。

第2章は「道端の異邦人」すなわち、「善きサマリア人」のたとえ話が語られます。有名な話ゆえに、見落としている点に気づかされる章です。教皇フランシスコの丁寧な語りに触れながら、私は自分を倒れている傷だらけの異邦人として観ていきました。これまでどのような傷を負い、誰に助けられてきたのか。誰が私の隣人となってくれたのかを思い起こしたのです。倒れている弱者の視点から、通り過ぎていく人々を見つめていくとき、私たちは、どこに「橋を架けたらよいのか」見えてくるのではないのでしょうか。

②第3章から第6章で夢を描く。

私たちは問題点の指摘や、ともすれば批判的な態度に積極的になることが多々あります。し

かし、それ以上に神の秩序で満たされた世界を想起し、壊された世界を創造的に立て直す、美しい夢や目標が必要ではないでしょうか。第3章からは、そのための道標が記されています。この夢に開かれることは、自分自身から抜け出し、普遍的な交わりに向かう「回心」へのチャレンジでもあります。

特に、第5章ではキリスト者がどのように政治に向き合うかという、これまでにない言及がされています。「政治において実践する愛」に対して、教皇フランシスコは深く、強い決意を示し私たちを励ましています。

③第1章「閉ざされた世界の闇」を観る。

さて、夢を取り戻し、力をいただいた後で、いよいよ世界の厳しい現実に向き合います。しかし、どのような状況を目の当たりにしても、私たちはもう目を背けることはないでしょう。「私の」から「私たちの」善へ向かう夢を見出しているからです。そして「傷の回復につながる平和への歩み」に対して、決意が芽生えていることに気づかされるでしょう。

④第7章、8章で奉仕への意識を深める。

様々な傷を持つ私たちは、癒しの道を辿りつつ、世界の傷に気づく「連帯者」となる呼びかけを受けます。さらに248項で「広島・長崎」の記憶が取り上げられており、私たち固有の使命を再度意識付けられたように思えます。そして最終章を読み終える頃には、この回勅が「社会的回勅」と呼ばれる意味を深め、「ともに暮らす家」の兄弟たちの顔が浮かんでくるはずです。

私は回勅の呼びかけに、夢と決意を持って応えたい。「兄弟姉妹のために、橋を架けに出かけてきます！」



映画『標的』

(2021年製作、西嶋真司監督)



1991年8月14日、^{キムハクスン}金学順さんが、歴史上初めて、ご自身の「慰安婦」被害をソウルで名乗り出、これが今日の日本軍「慰安婦」問題の事実上の発端となりました。実はその3日前、金さんについて「女子挺身隊の名で戦場に連行され、日本軍人相手に売春行為を強いられた」と書いた記事が、朝日新聞に掲載されています。この記事を書いたのは、当時朝日新聞の記者だった植村隆さん（現在、「週刊金曜日」発行人）です。

2014年、社会の右傾化の波の中で、この記事を捏造とする批判文が「週刊文春」に突然掲載され、これを機に、植村さんやそのご家族に対する、右翼からの執拗なバッシングや激しい脅迫が始まりました。植村さんはこれらを名誉毀損として2つの裁判を起こしましたが、2021年3月までに、最高裁判所は訴えをいずれも棄却しました。

映画『標的』は、植村さんと彼を支える多くの弁護士、ジャーナリスト、市民たちの、今日に至る不屈の闘いを描いています。なぜ、何を根拠としてこのようなバッシングが起こり、裁判所は植村さんの訴えを棄却したのか。日本社会に張り巡らされる暗い政治権力のネットワーク、ジャーナリズムと司法の危機

的な状況が、ここに浮かび上がります。

植村さんは、この闘いの中でソウルのカトリック大学校に教授として招聘され、韓国でカトリックの洗礼を受けています。

このほど、『標的』が、第64回JCJ（日本ジャーナリスト会議）賞*1（2021.8.15受賞）、及び韓国の第33回アン・ジョンピル自由言論賞（2021.10.18 発表）*2を受賞し、日本カトリック正義と平和協議会も「推薦映画」に認定いたしました。（2021.10.15）。日本カトリック正義と平和協議会では自主上映会を企画中です。

映画『標的』の詳細は、公式サイト（<https://target2021.jimdofree.com/>）をご覧ください。自主上映会などの情報もこちらからご覧ください。

*1 JCJ賞 新聞・放送・出版などにおける毎年の優れたジャーナリズムの仕事を顕彰するもので、1958年に始まりました。

*2 アン・ジョンピル自由言論賞 権力などに屈することなく、言論の自由の促進や真実の報道で卓越した業績があった人に与えられる賞で、1987年以来、毎年授与を行ってきました。

境目のない心で

■ 阿部慶太 (フランシスコ会)

教皇フランシスコ（以下教皇）の回勅『兄弟の皆さん』（FRATELLI TUTTI）の日本語訳が出版されました。今回も『ラウダート・シ』に続きアッシジの聖フランシスコ（以下フランシスコ）の言葉が使われた回勅です。

この「兄弟」という言葉は、フランシスコが同じ修道会の会員だけでなく、多くの人や被造物に対して呼びかけた言い方です。

回勅では、パンデミックによる悲劇やライフスタイルの変化、難民問題、社会から見捨てられた人々への課題、国家間の問題、政治に必要とされる役割、平和を構築する必要性、宗教が果たすべき役割、対話の必要性などなど、教皇からの問題提起や、現代社会の課題にキリスト教的な視点や観点から取り組まなければならないことが満載された内容です。

個人的には、序文の「境界なく」と第三章「開かれた世界を描き、生み出す」、第四章「全世界に開かれた心」が、フランシスコの生き方にも関連するので、フランシスコ会に属するものとしては気になりました。

フランシスコは中世の世界において、イスラム教徒、キリスト教徒を問わず立場を超えた対話と和解への道を模索したことで知られています。さらに、すべての被造物に対しても兄弟姉妹と呼びかけるなど人類と自然との和解にまで、その生き方は広がりを見せており、「グッピオの狼」*の話は、狼による被害から人々を守った、ということよりも自然との和解のシンボルのようなお話です。フランシスコがグッピオを訪れた時代、領地拡大などにより、自然は当然開拓され、野生動物もさらに奥地に追いやられるか、狼のように人里に下りてきたため、人を襲うということが考えられたそうです。開発によって被害を受けた代表が狼と考えることができます。こうした開発の問題や、人類と自

然界との和解については、前回の回勅『ラウダート・シ』においても詳しく触れられています。

フランシスコのように対話と和解へ道を模索することは現代でも必要とされています。こうした「境界のない」姿勢が意外なところでも支持されていると感じたことがあります。アッシジに巡礼した時のことです。ノルウェーからルーテル派の大勢の巡礼団に遭遇しました。団長の牧師になぜアッシジに来たのかを尋ねると「フランシスコの境界がないところが好き。自分たち（プロテスタント）が来ても、その心で教派を超えて受け入れてくれるように感じる」と言いました。

その時の「境界がない」という言葉が印象に残りました。今回の回勅でも使用された「境界のない」ということは、確かに立場の違う人たちと対話をするときにも、困難にある人を支援するときも大切な姿勢です。

第二章の「道端の異邦人」の中でも善きサマリア人のたとえ（ルカ10・25-37）を通して、教皇は立場を超えて助けを必要とする人々へ自分を開いてゆくことの必要性に触れています。善きサマリア人については、多くの方がご存知なので特に説明をしません。当時の社会でユダヤ人とサマリア人の敵対関係を知る人なら、善きサマリア人がとった行動はいかに境目がなかったのかがわかると思います。

しかし、この「境界のない」ことを実践しようとしても、難民問題や人権問題の場合、多くのハードルが目の前に立ちただけです。国境の壁、言葉や文化の壁、思想の壁、法律の壁、政治的な要因などなどです。

こうしたことは、三章、四章の中でも世界中の様々な場所で起こる問題として書かれています。また、一人の人間としても境目を超えるた

めには自分の限界を超えていこうとする努力や考え方を変える、または自分自身を開き与える姿勢など課題は多いといえます。つまり、チャレンジが必要なのです。

私事になりますが、フランシスコ会・総本部のJPIC（正義と平和と被造物の保全）事務局でも、宗教を超えた連帯とか、SDGsに関わるNGOや団体とのコラボレーションという境目のない働きかけが奨励されています。日本よりも海外の管区のほうが、こうした動きは盛んです。

私たちの日本管区の場合、こうしたコラボレーションの他に、隣国の韓国管区とのコラボレーションを十数年前に総本部から勧められ、合同会議や合同研修を行うことになりました。日韓問題という壁を超えるのにどのように共通理解を持つのかなど話し合いを重ね、共通の問題について合同で取り組む計画を出せるまでになりましたが、そこまで10年以上かかっています。互いに心を開いて、同じ兄弟という意識をもって取り組まないと不可能な取り組みだったと思います。

さて、回勅にもどると、最後にイスラムの指導者アル＝アズハルのグランド・イマーム、アフマド・アル・タイーブとの共同文書「世界平和と共生のための人類の兄弟愛」が付録として添えられています。この文書は2019年2月4日付のもので、フランシスコとスルターン・マリク・アル＝カミールの会見から800周年に出されたものです。

この年、教皇が歴史的な対話を試みた点から、世界平和のためにキリスト教とイスラム教の対話が重要であることを教皇自ら示すと同時に、立場や宗教を超えて、境目のなかったフランシスコの心を生きようという姿勢が感じられます。

フランシスコは約800年前のキリスト教社会の人びとが想像しなかった方法でイスラム教の指導者のもとに武器はおろか何も持たないで対話に行きました。無謀ともいえるその行動は、対話するだけにとどまらず、異なる宗教者との交わりを生み、聖地にフランシスコ会だけでな

くキリスト者がイエスゆかりの場所にとどまることのできる礎^{いしづえ}となりました。現在、聖地にフランシスコ会や他のキリスト者がいるのは、宣教活動云々よりも対話と非暴力のしるしであり、他宗教との対話や共存に勤めながら奉仕を続けています。

それが可能になったのは、フランシスコが「境目のない」というものを体現していたからに他ならないと思います。今の時代だからこそ、こうした「境目のない」心をどのような場所で、どのように生きるのかが、キリスト者一人一人に問われているといえます。そのため、教皇のイスラム指導者との対話も今回の回勅も、キリスト者を代表して、境目のない心を生きたいという宣言のように感じるのです。

「グッビオの狼」の話

フランシスコがグッビオという街にいた時、一匹の獰猛な狼が人や家畜を食い殺してグッビオの人々を苦しめていた。フランシスコは一人狼に会いに行くと、狼がお腹を空かせているために人間を襲っているのを知り、人間と仲直りし、もう人間を襲わないなら、グッビオの人々から死ぬまで餌をもらえるようにしてあげると、狼に約束をした。これによって狼は人を襲わなくなり、狼はグッビオの人々から愛されるようになった。



聖フランシスはオオカミに指示します
(Carl Weidemeyer, 1911年)

回勅『兄弟の皆さん』の翻訳に携わって

■ 西村桃子（セルヴィ・エヴァンジェリー会員）

先日、回勅『兄弟の皆さん』（カトリック中央協議会、2021年9月）が刊行しました。回勅の翻訳作業に携わり、学んだこと、苦労したところを書きたいと思います。

教皇は回勅の中で、わたしたちがすべての人と兄弟になることを妨げている現代世界のいくつかの傾向について語ってくれています。

この回勅において、個人的に学んだことは、2019年の教皇の訪日のテーマでもありましたが、すべてにおいて、すべての人のいのちを大切にしている教皇の徹底した姿勢です。特に、もっとももろく弱い人々、移住者や周縁部で暮らしている人々がなごりにされている現実に対して、明確かつ具体的に語っているところです。

ほんの一例ですが、教皇は第3章で所有権について語っています（118～127）。そこでは、被造物は万人のため、地上の財貨は万人のためであることが語られています。尊厳ある生活に必要なものを持たずにいる人がいることから、それをだれかが手放さずにいるからだ、という考えが導かれる、としています。財の共同使用について個人レベルだけではなく、国家レベルにおいても指摘しています。

自分のもっている能力や財産は自分のもの、国のもっているものはその国のものであり、余力があれば他に分ける、と考えている人がいるかもしれません。もしくはその余力さえも自分のために使うことが当たり前だと思っている人もいるかもしれません。わたしも無意識のうちに、気をつけないと、そのように生きているときがあると思います。

この箇所を翻訳していたとき、かつての自分の体験を思い出しました。わたしが所属する宣教会の初期養成で3年ほどフィリピンに住んでいたときのことで、あるとき、神学の試験のために同じ授業を受けていた他のクラスメイト

たちと一緒に勉強をしていました。わたしは数時間して勉強を終えました。しかし、他の人たちはその後、何時間経っても勉強を終える気配がありませんでした。彼らを見ていると、要点がなんであるかをあまり理解せずに、一字一句書かれていることを一生懸命暗記しているようでした。その様子を見て、あまり勉強の方法論をつかめずにいる印象を受けました。クラスメイトの多くは、自分は学校に通うことができなかった親が、苦労して大学に行かせている人たちでした。そのときわたしは、一概に言えないとは思いますが、経済的に貧しい地域は教育レベルも決して良くないという現実を目の当たりにしました。同時に、わたし自身は、なにも特別なことはしていないのに、生まれた国や家族のおかげで、なに不自由なく教育を受けてきたということに、ハッとさせられました。わたしたちに何か能力があるとしたならば、それは与えられたものなのだから、自分のために使うのではなく、みんなが豊かになるために共有するのが受けた者の責任であり義務であると、そのときに強く意識させられました。

この回勅は、現代社会にはあまりに多くの問題があり、分裂・分断があまりにも当たり前になっているために、何が問題であるのかも理解できなかったわたしに、人間として、キリスト者として、どのような具体的なまなざしをもち、生き方をすれば、わたしたちみんなが兄弟として生きられるのかを教えてください。

翻訳作業の中には、スペイン語からどうやって日本語に訳せばいいか悩み、苦労したところがいくつかあります。

まず、スペイン語の一文が長いことでした。スペイン語は一文が非常に長くなる傾向があります。文が長ければ長いほど教養がある、と思っている人もいます。多くの場合、冒

頭に結論（主語と述語）があり、そのあとに関係代名詞と長い節があり、文章が構成されています。日本語に訳すときに、どこかで切らないとわかりづらいので、文章を分けるように心がけました。一文を2～4文に分けるときのときもありましたが、そのときの各文の主語と述語をどのようにすればいいか、悩みました。例えば、使徒的勧告『愛するアマゾン』を引用して自分たちのルーツを大切にするように勧めている箇所があります（148）。日本語では4つの文に分けられた文章となっていますが、原文では一文です。

また、教皇フランシスコが使う言葉で、日本語では多様な表現が用いられるものもいくつかありました。

「民」「民族」と訳されるpuebloという言葉は、どのように訳せばいいか本当にわかりませんでした。添削をしてくださった経験豊富な出版部の方々が助けて下さり、適切な訳をみつけてくれました。翻訳ではほとんどが「民」と訳されていますが、文脈によっては、「民族」「人々」「民衆」や「国民」と訳しているところもあります。99ではsu propio pueblo（直訳だと「自分自身の民」）を「自分のいるグループ」、143ではmi pueblo（「わたしの民」）を「同胞である民」と訳しています。

多くの場合「大切にする」「世話をする」と訳されるcuidarも訳すのに苦労しました。回勅『ラウダート・シ　ともに暮らす家を大切に』の「大切に」はcuidarの訳です。また今年の「世界平和の日」の教皇メッセージ「平和への道のりとしてのケアの文化」の「ケア」もcuidadoとあって、cuidarの名詞です。回勅の邦訳では、「大切にする」（17、57、148）、「監督する」（43）、「心を配る」（79）「世話する」（98、115）「配慮」（174）と訳しています。

そして、「使い捨て文化」や「出向いていく教会」の言葉に代表されるように、教皇フランシスコはわたしたちの印象に残りやすい言葉をよく使っていると思います。また出身国のアルゼンチンでしか使用されていなかったり、彼自

身が造語を作って語りかけたりしているときも多くあります。

この回勅においても、「フランシスコ語」があり、なんとなくニュアンスは理解できても、本当に正しいのか、判断の難しかった箇所が一つありました。78において「不毛な内輪の争い」（internismos estériles）と訳している表現です。直訳は、「不毛な内輪イズム」といったところでしょうか。何人かのスペイン語圏の人に聞いても、本当のところは分からずにいました。最後に、教皇の教え子で日本にいるアルゼンチン人のアイダル神父さん（イエズス会）に聞きました。彼によると、教皇は管区長だったとき、よくこの言葉を使ったそうです。教会内や共同体内で「グループ」を作って、自分のミッションを忘れてしまう傾向について伝えるときに使っていたそうです。特に第二バチカン公会議後、アルゼンチンの軍事政権下において、多くのグループが自由主義か保守派か、社会派か教育系かなどの内輪争いをしていました。それらの争いについて、教皇は「不毛」と言っており、今日同じようなことが教会で起きているためこの表現を使っている、と教えてくれました。このことを踏まえて、日本語に訳しています。教皇が使っている言葉の裏に隠されている意味を知っている人が、日本に身近にいることは恵まれているな、と感じた出来事でした。

スペイン語で教皇の文書を読むと、一人ひとりの人に寄り添い、決してわたしたちは見捨てられていないと感じられるような書き方がされていることに気づきます。同時に、行いを通してキリスト者として生きるように強く促されるような文体であると感じます。翻訳に携わらせてもらい、少しでも教皇が原文で伝えているニュアンスが伝えられたら、と思いながら訳しました。この回勅を通して、現代世界の問題に希望のまなざしをもちながら真摯に向き合い、すべての人とつながっていることを忘れずに、過ごしていきたいと思っています。

神の武器で闘う

—教皇フランシスコの平和を作るための四つの原則—

■ 中井 淳 (イエズス会下関労働教育センター)

社会教説行脚4年目は、前年2019年の教皇フランシスコの訪日の波にのり、どうしても取り上げたかった「平和を作るための四つの原則」を分かち合うことにした。使徒的勧告『福音の喜び』を読んだときに感銘を受け、活動を励ましてきてくれたこの四原則。いつかこれを用いて話ができればと願っていた。

下関労働教育センターの所長になって5年が経とうとしている。この間、できることをやってきたつもりだが、その成果はと問われると心もとない。心の内からか、外からか、「早く結果を出しなさい」という声が聞こえてきて自分を苦しめる。そんなとき、いつも思い出すのが、「時は空間に勝る」。この世の権力は、短期的なスパンの中で結果を出そうとし、空間を支配することで己の力を誇示しようとする。そのようにして不必要で無駄になってしまったものがどれほど多くあることだろうか。旧約聖書のとてつもなく長い歴史を通してイエス・キリストの誕生が準備されていったように、神は時間をかけながら働かれる。教皇フランシスコは、私たちの手の内に、平和のための種があるなら、それをどんなに小さくても撒いてごらんください、という。こつこつゆっくりと。それは必ず、時間をかけながらも、神がからし種から成る木のように成長させてくれるから、と。そうするならば、私たちは、自分を、人々を、社会を、待ってあげることができるようになるだろう。

平和の種を蒔き、それが育っていくためには、私たちは、社会の大地、現実の人々の傷の中に分け入っていく必要がある。そうでなければ、たちまち、私たちの信仰の箇条はイデオロギーになってしまう。イエスが、病を負った娘の癒しを懇願するシリア・フェニキアの女性との出会いにより自らの地平を広げたように、私

たちは人々との出会いを通して、自分自身が変わられ、使命が新たにされ鮮明となってくることを経験する。だから外に出て行きなさい、と教皇フランシスコは何度も私たちに鼓舞するのだ。「現実はいデオロギーに勝る」と。現実の中で、私たちは傷んでいる人とともに痛む中で、その中に共におられる主に出会い、その傷は連帯のきずなへと変えられていく。弱い人間であることに向き合うところから羊の匂いはかおってきた。

私たちはそうして苦しんでいる人々の立場から不正義と歪んだ社会構造へと立ち向かってゆく。しかし、それは分裂や対立を深めるのではなく、向こう側へと橋をかけていくやり方ではない。分裂することをほくそ笑んでいる悪の力に注意しなければならない。だからこそ、私たちは、憐れみとゆるしという神の武器で闘わねばならないのだ。「一致は対立に勝る」。教皇フランシスコは決して人を憎まない。本当の敵は人間ではないとわかっていたから。

最近、新たな任務を与えられた。従来のやり方から抜け出すことを望まれているように感じる。狭い視野からより広い世界に目を向けること。教皇フランシスコがコロナ禍で繰り返す「ダイナミックでありなさい」という言葉は、既存のあり方から抜け出ていくことを意味する。「全体は部分に勝る」という原則。ローカルでありながら、グローバルであること。この原則をよりよくわかるように与えられた使命なのかもしれない。

社会教説を頭だけでなく、心の次元で受け入れて変容が起こるように、一つ一つの原則において、それに沿う聖書箇所を示し、しばらく黙想してもらった。講話の後の分かち合いはとても充実したものとなった。



ふたたび、クリスマスにウケないお話 ～言は肉となって、わたしたちの間に宿られた～

■ えなこさいち (生活介護事業所職員)

パートナーがある漫画を紹介してくれました。企業に勤務する47歳男性の営業本部長（以下、本部長）が突如、赤ちゃんになってしまうが（記憶はおとなの時のまま）、部下たちがサポートしつつ、業務をまっとうしていく……シンプルに申しあげるとこのようなお話。コメディとして描かれているので絵柄は親しみやすく、読みやすいです。設定は荒唐無稽なようですが、なかなか読み応えのある作品でした。

主人公である本部長は、赤ちゃんになってしまったことで、これまでできていたことの多くが、当然ひとりではままならなくなります。赤ちゃんの視点に立つことで、かつては思ってもみなかったことに気づかされます。自分の価値観やペースでよい結果を出そうと采配していたことが、部下たちに無理を強いたり、疲弊させてしまっていました。なんでも自分でできていたようでも、実際には多くの人びとに支えられていたのです。

本部長をおもに支える3人の男性社員。豊富な育児経験で本部長をサポートする社員はゲイのカップルで子育てをしています。自分の意思で結婚という選択をしていないにも関わらず「未婚」であることをたびたび話題にされ悩む課長はいつも赤ちゃんの身体である本部長を尊重して行動します。的確なアドバイスで本部長を支える部長は妻との暮らしで子どもはいません。

周囲の人びともさまざまです。女性の社員の会話から本部長は女性が日常的にどれほど理不尽な状況にさらされているかを知ります。家庭の「あるべき姿」に捕らわれ多様性になじめない同僚、取引先には、どんな姿であろうがその人に変わりはないと赤ちゃんの姿の本部長とも商談を進める人もいれば、中身は変わっていても赤ん坊とまともな話はできないと拒絶する商談相手……。

本部長が人の支えがなければ生きていけない赤ちゃんになったことから、自身、周囲の人びと、さらに日々の生活環境までもが、だれもが

受け入れられ、働きやすく、暮らしやすいものに少しずつ変わっていきます。

なぜ救い主は幼子＝人の赤ちゃんとして生まれたのかと考えていたので、この作品とはタイムリーな出会いでした。

2年前に初めてこの場をいただき「クリスマスにウケないお話」と題して、福音書の「誕生物語」から、忌避され、抑圧された人の側に立つ生きざまを救い主はその誕生から揺るぎなく示された、と書かせていただきました。その中でもふれておりますが、当時のユダヤの人びとは、度重なる「異教徒」による支配の中で「異教徒もひれ伏さずにおれない、力強く栄光に満ちた姿で救い主は現れる」と期待していたようです。でも救い主は、わたしたちと同じく、ひとりの母親から、守り育てる者がいなければ生きられないか弱い者として、ひっそりとみずからをあらわします。

ヨハネ福音書は神の思いを^{ことば}“言”と表現しますが、その「言は肉となって、わたしたちの間に宿られ」（ヨハネ1・14）、その弱さが人を関わり合わせ、つないでいくのです。これは、「人が独りでいるのは良くない」（創世記2・18）という創造主の思いに人を立ち返らせるためにその生涯を差し出したイエスの生きざまを前もって明らかにしているのではないのでしょうか。そして人となった救い主は、ひとりの人＝イエスとして、みずからの人としての弱さの中で、神の使命を受けとめていったのではないかと思うのです。

この拙文を書かせていただいている時に衆議院選挙の結果が出ました。わたしたちが生きる社会で、人を排除し、分断し、その尊厳を踏みにじるような傾向が強まっていくようなら、^{ことば}“言”を生き抜いたかたを知るキリスト者は黙ってはいられない！……はずですよ！

特集 回勅『兄弟の皆さん』を読む

- 1 イスラームの平和思想 …………… クレイシ・ハールーン・アフマド
 - 4 回勅『兄弟の皆さん』—呼びかけに応えたい— …………… 橋本晶子
 - 5 映画『標的』
 - 6 境目のない心で …………… 阿部慶太
 - 8 回勅『兄弟の皆さん』の翻訳に携わって …………… 西村桃子
 - 10 (連載第4回)カトリック社会教説 一歩一歩
神の武器で闘う
—教皇フランシスコの平和を作るための四つの原則— …………… 中井 淳
 - 11 (連載第14回)シロツメクサの花かんむり
ふたたび、クリスマスにウケないお話
～言は肉となって、わたしたちの間に宿られた～ …………… えなこさいち
 - 12 苦虫のつぶやき …………… 光延一郎
- まんが 連載第3回「神学生トマス」

表紙写真

OPAWCという女性団体がカブールで運営していた女性用の識字・職業訓練コースの授業風景 (2015年9月14日、撮影者：清末愛砂)



苦虫のつぶやき

闘うオプティミズムを抱け！

総選挙で勝ったのは「無投票党」だった…。現状肯定の大波に飲み込まれた感じ。コロナ対策の検証は？公文書改ざん・隠蔽、気候危機、女性の社会進出や選択的夫婦別姓、ジェンダー・性的少数者、格差・貧困、自殺者、移民・難民…、南西諸島への基地建設、原発推進、労働者の給料ちっとも上がらない、産業や技術力の沈降…etc. etc. このままで良いの？世界はどんどん進んで行くのに、日本はそろそろ周回遅れでしょう。でも、与野党僅差の選挙区もたくさんあり、ちょっとした風向きで結果は逆転していたかもしれないらしい。女性・若者がもっと議員にならねば！なにより心配なのは、改憲勢力が三分の二以上になったこと。憲法9条を変えたい人々には共通点がある。不安や恐れを政治の道具にすること。特定の国への不安を煽る。安全保障＝武力だ！…と思っている。心に恐れが一杯詰まっていて目を尖らせる中学生みたい。けれど、それは神の愛とは反対でしょう。「愛には恐れがない」(Iヨハネ4・18)。できるかぎり神のみ旨をこの世に実現しよう、最後のリスクを愛の神にゆだねながら。それがキリスト教の希望ではないか？ノーム・チョムスキーも言う。「未来が良くなると信じない限り、それをかなえるための責任もない。オプティミズムは、生きるための戦略だ。闘うオプティミズムを抱け。まずはそこからだ」。教皇フランシスコが『兄弟の皆さん』で訴える社会的友愛とつながっている！

光延 一郎 (日本カトリック正義と平和協議会秘書、イエズス会)

編集後記

- ・狭量で目先のことばかりを求める政治の数々を目にしていますが、忘れないでください。「国難に際して、わたしたちが気高い原則を掲げ、長期的な共通善を思い描くとき、真の政治的手腕が明らかになります」。(178)
- ・苦しみの原因となる社会の状況を変えるための行いは、すべて愛のわざです。(186)
- ・真の和解とは、対立から逃げずに、対立の中であって、対話と、オープンで真摯で辛抱強い交渉を通してそれを克服することで実現するのです。(244)
- ・「正戦」の可能性について語るべく、過去数世紀の間に合理的に練られた基準を、今日支持することは極めて困難です。二度と戦争をしてはなりません。(258) 以上、『兄弟の皆さん』から (h)



発行日 2021年12月1日 (隔月発行)
 編集発行 日本カトリック正義と平和協議会
 〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
 TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
 E-mail jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料 年 1,800円 (送料共)
 郵便振替 00190-8-100347
 加入者名 カトリック正義と平和協議会

<http://www.jccjp.org>